

橋の上のゆうれい（鳥井町）

シウウ、ポンポン。おぼんの夜、のぼるはいとこのたけしと花火をして、かん声をあげていました。

パチパチと美しく輝いていた線香花火が消える  
と、あたりはまっくらになってしまいました。

えんがわで、さつきから花火を見ていたおじい  
ちゃんは

「ゆうれいのお話をしようかな、さあ二人ともおい  
で。」

と、たばこの灰をポンポンと落としながら言いました。

「えー、ゆうれいなんてほんといにいるの。」

「あー、じちゃんもよく聞かされたよ。」

2人は信じられない顔で、おじいちゃんの横に  
すわると、おじいちゃんは静かに話し始めました。

じいちゃんが、まだ若いころ、夜になると、と  
きどき日野川の橋の上に、ゆうれいが出ると言う  
うわさが広がりました。

ある晩のことです。

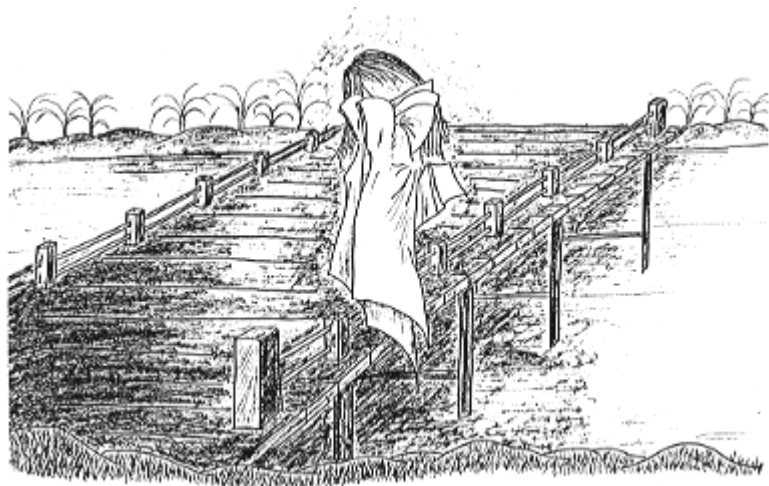
じいちゃんが東京へ行っての帰り、鯖江の駅に  
ついたのは、午前二時過ぎでした。おそくなった  
なあと思いながら西鯖江から有定橋まで歩いてく  
ると、橋の方から若い男が、ハアハア息をはずま  
せながら、

「橋の上にゆうれいが出た！おとろしておとろし  
て、とっても帰れん、宿屋に泊まらんとあかん  
わ。」

と言って、町の方へ行ってしまいました。

じいちゃんも、どうしようかと迷いましたが、  
うちでは親が心配しているだろうなと思って、ま  
た歩き始めました。

しばらくすると、向こうから黒いかげが近づい  
て来ました。大きい男の人でしたが、ブルブルふ



るえながら、橋の方を指さして、

「あれはきつとゆうれいや。長いかみをふりみだしてのふり、白いのがユラユゆれているゆんにや、おそろして、おそろして。ほんでも、あんなさんは行きなはるんけの。」

と言います。じいちゃんもこわくなってきたけれど、

「どつでも橋をわたらな、帰れんさけの。」  
と言つと男は、

「やめなはれんせえの。」  
と言いながら、急いで町の方へ走っていつてしまいました。

じいちゃんはこわくてしばらくは足が動きませんでした。気がとり直して歩き始めました。とちゆうまさかの時にと思つて石ころを二つ、三つひろつてにぎりしめ、橋のたもとに着きました。すると、橋の中ほどに、白くひらひらするものが見えます。おそろおそろ近づきながら、

「エッヘン、エッヘン。」

と、でつかいせきばらいをして、横を通りかかると、頭のかみが腰まで長くなれば、白い着物をだらりと着たゆづれいが、後ろ向きでらんかんにもたれていました。

どうしようもないので、思いきって、

「今晚は。」

と声をかけましたが、答えがありません。あわてて通り過ぎようとすると、くるりとこちらを向いたそのゆづれいには足がなく、すぎとおるような青白い顔をして、こつちへ少しずつ近づきながら、とがったあごを前に出して、にたりと笑いました。もうびつくりして腰が抜けそうになり、はうようにして橋を渡り終え、堤防にさしかかると、風に吹かれたすすきの葉がザワザワとして、ゆづれいがまた追いかけてくるような気がして、後ろを見ないで走って帰りました。

「そのとき、じいちゃんは考えたんだ。なあ二人

とも、人が死んだときにはの、こつたうちのもん（者）が供養さえしてあげれば、ゆづれいなんて出んと思うけどな。」

二人は何も言わずに、大きな目だけぎよろりとさせて、うなづいていました。

とつぜんのぼるは、

「毎日、みんなで仏さんにお参りするといいにやね。」

「うん、ほうや（そつだ）ほうや。」

そう言っておじいちゃんは、お盆のおつとめを始めた、のぼるも、たけしも後ろのすわって、手を合せていました。

